

『主イエスを迎える喜び』。ヨハネ6:16-21

6:16 夕方になったとき、弟子たちは海べに下り、

6:17 舟に乗って海を渡り、向こう岸のカペナウムに行きかけた。すでに暗くなっていたのに、イエスはまだ彼らのところにおいでにならなかった。

6:18 その上、強い風が吹いてきて、海は荒れ出した。

6:19 四、五十丁こぎ出したとき、イエスが海の上を歩いて舟に近づいてこられるのを見て、彼らは恐れた。

6:20 すると、イエスは彼らに言われた、「わたしだ、恐れることはない」。

6:21 そこで、彼らは喜んでイエスを舟に迎えようとした。すると舟は、すぐ、彼らが行こうとしていた地に着いた。

●序論

先週一つのキーワードとして「テスト」という言葉を上げました。

それは、合否を決めるためではなく、「成長する」ためのものだとお話したのです。

イエスさまが何者であるかを今知識で知る以上に信じて知る者、また経験する人生へと入れられています。ヨハネはそれこそこの福音書の目的であると示します。

ヨハネ20:31 しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

●本論

I. それは、主イエスがいない船出でした

6:17 舟に乗って海を渡り、向こう岸のカペナウムに行きかけた。すでに暗くなっていたのに、イエスはまだ彼らのところにおいでにならなかった。

これは、弟子たちだけでガリラヤ湖の向こう岸のカペナウムに船出したところの記事です。そこにはイエスさまの姿はありませんでした。

また荒れた海で、彼らがどれほどそこで苦労したかということも記されていません。

この福音書に耳を傾ける1世紀後半の信者の多く、そしてわたしたちも同様に、その目では「イエスさまを見ることのない」人生の旅路を歩んでいます。

それはいわゆる、「舟」にたとえられる教会のありさまとも言われます。

つまり今、わたしたちは、目には見えないけれども生きておられるイエスさまを心から信じ、その言葉を信じて従って歩んでいるのです。

このヨハネの福音書の目的でもある20章31節を紹介しましたが、その前には、あの復活のイエスと出会った弟子トマスに向けて、語られる言葉がありました。

20:29…「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。

20:30 イエスは、この書に書かれていないしるしを、ほかにも多く、弟子たちの前で行われた。

20:31 しかし、これらのことを書いたのは、あなたがたがイエスは神の子キリストであると信じるためであり、また、そう信じて、イエスの名によって命を得るためである。

多くの奇跡は、多くのチャレンジ、テストは、よりいっそうイエスさまを知るためです。そうしてわたしたちもまた、イエスさまへの信頼を深められるのです。

AG fellowshipのGood Reading 「聖霊の炎を掲げて」女性の宣教師マーガレット・カーロー先生の歩みが掲載されました。

この方は、救われて間もなく、日本への宣教師となる召しを受けました。

しかしその後、家庭の経済的事情や、太平洋戦争や悲しみを経験しました。それでもなお、彼女の日本への宣教の思いは変わらなかったというのです。

そのような期間と困難を経験する中で、彼女の信仰は深められた。宣教師としての彼女がもっとイエスさまを知り、その信仰をととのえる時間であったのです。

## II. 近づき語る主イエスの言葉があった

6:19 四、五十丁こぎ出したとき、イエスが海の上を歩いて舟に近づいてこられるのを見て、彼らは恐れた。

6:20 すると、イエスは彼らに言われた、「わたしだ、恐れることはない」。

風によって海が荒れ、船が目的地になかなかたどり着くことができない。

それはまるで、わたしたち信仰者の、そして教会の体験が描かれているようです。

ある先生は、この荒れた海を、サタンの妨げだとはっきりと表現します。

そうであるならば余計です。このところでそこに来られたイエスさまを見るのです。

荒れる海の上をイエスさまは、歩いて彼らに近づかれたのです。

暗闇をそして不意に襲う荒波、わたしたちの行く手を阻もうとする障害は確かにある。

しかし、聖書はそれをも足の下に置いて、わたしたちに近づき歩む方を語ります。

だから言えます。どんなところ悩む時にも、そこにイエスさまは来てくださいます。

その上で、ヨハネはここでそのイエスさまをイエスさまと分からずに(ほかの福音書では、幽霊と誤解して) 恐れた弟子たちを語ります。

「恐れ」は、弟子たちの、そしてわたしたちの目を塞ぎ、行く手を阻みます。

そんな中で、耳にしたイエスさまの言葉は彼らの目を開いたのです。

6:20 すると、イエスは彼らに言われた、「わたしだ、恐れることはない」。

「わたしだ」。英語では短く "It is I." です。「私だよ」「私がいるよ」という言葉こそが、イエスさまからの言葉です。

多くの解決法を示すよりも、また問題解決ハウツーを教えられるよりも、また嵐を鎮めてもらうよりも、遙かにすばらしい安心がここにあります。

聖歌の中で「655主がついてれば」という賛美

♪「主がついてればこわくはない」と聖書の内に書いてあります。

主は私を、主は私を、主は私を、愛してくださる。♪

今のわたしたちは、その目でイエスさまを見ることはできない。だから自分の歩み、そして教会の歩みも、その時代や周囲、また内部での問題などで、その歩みがとどめられるかのように見える時があります。

でもそこでこそ、イエス様は「わたした、おそれることはない」と語ってくださるのです。

この言葉を聞いて、あの弟子たちのように、わたしたちは自分の人生に、またこの教会に来て下っているイエスさまを迎えることなのです。

6:21 そこで、彼らは喜んでイエスを舟に迎えようとした。

### Ⅲ. 目的地に到着する幸いを経験する

6:21 そこで、彼らは喜んでイエスを舟に迎えようとした。すると舟は、すぐ、彼らが行こうとしていた地に着いた。

イエスさまを迎え入れたら、目的に到着したという経験を弟子たちはしています。

それは地理的にはカペナウムという町。でも霊的にはここでイエスさまをその船に迎えたことそのこと自体が、わたしたちが到着すべきところだとわかります。

ここでの経験は大切です。主イエスを迎え入れることです。

それがどれほど幸いなことか、弟子たちはここで経験しているということです。

### さいごに)

弟子たちは目的地に着いた。それで彼らはゴールではなく、そこから働きは更に続くのです。究極的には、彼らは、イエスさまの受難の十字架を目の当たりにし、その弟子としての彼らの自信も誇りもボロボロにされてしまう経験をします。

しかしイエスさまは三日目によみがえり、彼らのもとにご自分を現し、彼らを愛して、彼らを回復されました。

さらに聖霊に満たすことによって、見えるご自身を示すのではなく、「見えなくてもわたしはいる」ことを証しして彼らを遣わしていったのです。

先ほど紹介したマーガレット宣教師について。

困難な年月を超えて、やっと日本にたどり着いた。けれども、彼女にとってもそれがゴールではありませんでした。

そこから敗戦によって荒廃した日本の現状の中での働きがはじめられていくのです。それも神さまの語られ、導かれるままに。

その宣教初期には、「仙台へ行きなさい」との神さまからの声を聞いて、その地で開拓伝道をはじめ教会を建て上げます。それが今の仙台神召キリスト教会です。

彼女は、神さまに聞くことができ、応えることができ、そして遣わされた地で懸命に働くことができたのは、その歩みがイエスさまが共にある歩みであったからだとわかります。

彼女はそのことを通して、休暇中にアメリカの諸教会にこう証ししていたとあります。

「アジアの宣教師であることのチャレンジや満足が私のクリスチャンとしての生

活を豊かにしてくれました。私は出来るだけ早く東京に戻りたいのです。」

「むしろ豊かにされている」と語るそのことは、すべてをささげ尽くし、日本の魂の救いのために尽くした先生の証しがそこにあります。

これが人の魂を救うために働くということの喜びです。

彼女がアメリカで配ったという本のしおりにこう記されています。

Here am I Send Me

「わたしがここにいます。 わたしを遣わしてください」。

イエスさまを迎えるこの教会とわたしたちの人生も、こういう応答をして前進するものでありたいとねがいます